

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

みなさま開院後7年半もの間、武蔵藤沢セントラルクリニックでの診療をご活用いただき誠にありがとうございます。私、和田誠基は2017年3月で55歳になり、お爺となっております。本コラムでは私が医者になった理由、糖尿病・内分泌を専門としている理由をご説明させて頂きたいと思ひます。

第一部

私が防衛庁職員(防衛医科大学 校学生)となるに至った経緯

私は四国 愛媛県宇和島市南部の津島町岩松という田舎町で生まれた後、幼少期は福岡県久留米市高良内町で過ごしました。父誠二(2015年死去)は自衛隊の前身、警察予備隊から入隊し、私の幼少期は陸上自衛官として久留米市の陸上自衛隊幹部候補生学校に勤務しておりました。母敦子の里帰り出産の後、14歳(中学2年生)まで久留米市(高良内小学校、明星中学校)で過ごしました(その時は結構な肥満児でした)。少年期は父や一族の影響を受け学童期から柔道をたしなんでおり、各地での他流試合に出かけました(体重に任せて得意技は大外刈り、足技も得意でした)。肥満児で幼少期はいじめられていたように思いますが、小学時の通知表に周りの子供をいじめて困るとの担任のコメントを見つけました。母は教育熱心であり、絵画や英会話を始め様々な学習機会を提供してくれました。

15歳で父誠二が自衛隊愛媛地方連絡部に配属となると、実家を改築し故郷の津島町岩松に戻り、津島中学校に編入となりました。小学1年から続けていた柔道では、愛媛県団体の部で優勝し講道館での全国大会に出場する機会を得ました(他のメンバーが強かったおかげですが)。高校は地元理系高校の宇和島東理数科に進学しました。教育熱心な母は私と2人の妹(それぞれ嫁ぎ、現在は小学校教諭)を育てました。高校卒業時

点で、私は生まれ育った九州の国立大学への進学を考えておりましたが、防衛医大にも補欠合格しており、学費もかからない防衛医大に行けば妹二人も大学に出せてやれるかもしれないとの母の説得(国からお小遣いももらえとの説明あり)に納得して、医師になることとしました。従って、世の中の多くの医師たちのように純然たる医学を極めたい、病める患者さんを助けたいという心意気とは若干異なる立場でしたし、高校卒業直前まで医師になることなど考えておりませんでした。親族に医師はおりませんでした(和田家は多くは教諭などの教育職です)が大学に入れば美しい未来が開けているだろうと思っておりました。これは後に誤解と判明し、私は大学に進学したのではなく、防衛庁に就職したのだということがわかりました。しかし、入学後に母が重度の糖尿病合併症を併発。祖母に甲状腺癌、妹にも甲状腺腫瘍があり、何となく身近に内分泌代謝という領域が見えていました。

次回では、学生時代の体験と卒業後の進路についてご説明したいと思います。どうぞご期待下さい。

